

勝林寺寺報

おたあう世界

おいとの念佛に生きる人は、先に死んでゆく人も、淨土に生まれる」とにおいて、ふたたび会う」とができるのです。その」とについて、「阿弥陀經」では、「俱会一處」(くわい)一處に「善友あい見て慶樂する」とやむことなし」と明かされています。世間いっぽんの考え方によれば、人間死んだら、すべてが「おわり」です。なにもかも、いつさいが無に帰していきます。どれほど因縁深い親子でも、つよい愛情に結ばれた夫婦でも、ひとたび死が訪れたら、すべてが終わりです。しかしながら、念佛に生きる人にとっては、どれほど無残に死がおそいかかるうとも、淨土に生まれるということにおいて、必ずふたたび会う」とができるのです。

どうして、そういう」とがいいうるのやしょうか。それは念佛に生きる人は、ひとしく究極的な「真実」(おい)にふれているからです。念佛をもうすこいにおいて、あれこれのできる真実とは、いの世のものではありません。この世をまったく超えていふものであります。すなわち、時間を超えた永遠なるものであります。

それはいの世を超える、この時間を超えたものであるがぎり、死がいかにきびしくおそいかかるうとも、決して「われぬ」とのないものであります。念佛に生きるとは、いの世の中に生きながらも、そういうの世を超えた究極的な真実、永遠なるものに、たしかにたしかに、ふれて生きてゆく」とを意味します。

だからこそ、私たちがそのような真実にあって生きているかぎり、いかにきびしく死がおそれいかからうとも、がなはずよく死を克服する」とができるのであります。真実にふれ、永遠の

生命に生きているならば、死がいがなるかたちでやつて、よつとも、またたゞや、どれほど死におののき、別離の涙にかきくれよつとも、なぞのおののき、その悲しみの底において、おそいくる死をよく受けとめ、それによく打ちかって、新しい生命に生きてゆく一道がひらかれてくれるのです。念佛をもうし、真実、永遠にふれて生きるのは、ひとしく」とがやけるのです。

に向かって死を生きてゆく」とがやけるのです。死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」ことができると死んでも淨土において再会する」これがやけるのです。

親鸞聖人も、その晩年に、門弟にあてたお手紙の中で、「かならず、かならず、ひとといふくまよいりあうぐく候」ともつたねであります。このいふは、真実にやれて生きゆるもの、たしかな実感であったわけでありましょう。おいとの念佛に生きるもの、死に対する基本の姿勢

の念佛に生きるもの、死に対する基本の姿勢

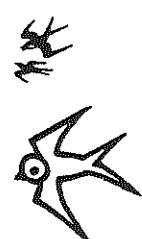
であります。

(信楽峻麿遺稿法語集より引用)

葬儀
五月十一日



榎見 横山 弘三様 六十六歳



第四八回出石組念佛奉仕団終わる

五月二十一・二十二日、念佛奉仕団として

七 日 (日) 西宗寺 前住職一周回

八 日 (月) 古田広師一周回

一〇日 (水) 永井 実宅一周回

一一日 (木) 中島利一宅一周回

田村あさの一周回

一二日 (金) 出石組 仏婦総会

一四日 (日) 出石組 仏婦総会

一八日 (木) 兵庫教区 組長・副組長研修会

二二日 (日) 勝林寺 納骨研修旅行

二三日 (月) 田村春夫宅 一周回

二四日 (火) 横山こはる宅 昭明法要

二六日 (金) みのりを聞く会

二七日 (土) おみがき奉仕

二八日 (日) 田中達夫宅 一周回

六 日 (土) 宮嶋義之宅 七回回

本覚寺 永代経

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

田村春夫宅 一周回

昭明法要

田中達夫宅 一周回

横山こはる宅 一周回

みのりを聞く会

宮嶋義之宅 七回回

西宗寺 前住職一周回

古田広師一周回

永井 実宅一周回

中島利一宅一周回

田村あさの一周回

出石組 仏婦総会

兵庫教区 組長・副組長研修会

勝林寺 納骨研修旅行

わたしの生きてきた昭和7

先月に引き続き、暁子前坊守生前のひとこま。

孫を保育園に迎えに行き、そのままバスに乗つて、妻の見舞いに行くのがそのころの私の習わなしの貸切状態でした。園で習った歌を歌うなどして三十分、孫は大はしゃぎです。おばあちゃん（妻）も、時間を図つて病室のベットに腰かけて私たちの訪れを待っています。お彼岸前後でしたが、窓いっぱいに赤い夕日が差し込んでいました。孫を真ん中に三人で座ります。すると孫が突然歌いだします。

ぎんぎんぎらぎら ゆうひがしずむ

まつかつか そらのくも

みんなのおかおも まつかつか
ぎんぎんぎらぎら ひがしずむ

窓いっぱいの夕日が三人を包みます。おばあちゃんが孫を抱いて「そうやねー、みんないつしょやねー」おばあちゃんの目には涙がいっぱい。この日の情景をわたしは、いつまでも忘れることができません。夕日の中で、みんな一緒に「観無量壽經」のお淨土を思い図る觀法の一番最初は「日想觀」といって、夕日に向かって淨土を思いみなさいと教えます。聖徳太子の立てた大阪の天王寺の門は西の方向に開いているとか。「親のない子は夕日を挙む 親は夕日の真ん中に」死んでしまった今もおばあちゃんは、いつも夕日の真ん中にいます。

妻は、若いころから実は病身でした。ずいぶん若いころは、定かではありませんがスモン病だといつて、和田山の病院に長く入っています。

たし、最後は、豊岡病院で癌が見つかり、入院、手術、抗癌治療を長く受けっていました。しかし、決して病気に負けることなく、一生、病気をも

ちながら病氣と付き合いながら、病を超えて輝

かしい生涯を自分で作り上げていった人でした。

抗がん剤の一回目の治療が一息つくや、髪の抜けた頭をものとせず、しかもひとりで、長男一家のいるカリフォルニアへ出かけました。「世

界中みな兄弟」彼女の言つたとおり、誰からも親切にしていただいて、言葉の通じない旅をしてアメリカにわたりました。病に倒れる前は、近くのお寺のご夫婦に誘われて方々に旅行に出かけていました。国内は勿論、海外までも。勝

林寺の遠い先祖の民間人最初の流刑地「八丈島」も夫婦で訪ねました。そして、最後はハワイで

した。西本願寺の仏教婦人会の世界大会参拝を兼ねた観光旅行でした。偶然、故郷島根の瑞泉寺一行と同じ飛行機だったことは不思議なことでした。祝賀パーティーには参加したもの、

観光の行程には参加できず、ひとりでホテルに残り、しょんぼりしていました。そのころから、病は次第に体をむしばんでいたのです。

生涯、病を抱え、病を押し伏せ、常に明るく、感謝して感謝して終わつた一生でした。人をも

知つたかぶつたりすることのない謙虚な生き方

でした。

縛られているから、どれだけ手にしても、満足

できない。このことを親鸞聖人は「煩惱」とい

う言葉でお示しくださいました。煩惱の所為に

利益より 威徳広大の信をえて かららず煩惱

のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる」(高僧和讃) そのあさましい自分に気づいたのであれば、手を合わせずにはおれなくなる。南無阿彌陀佛と稱えずにはおれなくなる。祖父は「なんでも買ってやるから、いつか、そのあさましさに気づけよ。それに気づいたら、手を合わせずにはおれなくなるぞ。阿彌陀様のお計らいに

出会うことができるぞ」と、私にはたらきかけてくれていたのでしょうか。(名古屋 有隣寺住職)

法語カレンダー六月 (H.P.より抜粋)
ものが 繰るのではありません

ものとどうする心に繰られるのです

どすん

今月も「勝林寺寺報」を最後の「どすん」まで読んでいただきありがとうございました。

「どうぞ」と声をかけたいへんでしょう」と声をかけたいへんことがあります。B4

裏表の記事をそろえることは、結構大変そうに見えますよね。でも、皆さん、よく見てください。信楽先生の原稿、住職の行事予定、前住職の原稿、ホームページの抜粋などは、私が書いているのは、ほぼこの欄だけなのです(笑)それより、寺報ができるから皆さんのもとに届くまでに、たくさんの方のご奉仕をいただいています。まずは、地区ごとに教えて仕分けし、一枚一枚折つて封筒に入れ発送準備を整えてくださる方。地区の代議員さん宅に届けてくださる方。地区のご門徒一軒一軒に配つてくださる方・・たくさんの方のお蔭によりて、ようやく皆さんのもとに届きます。ところが、長きにわたり出石地区の寺報を配つてくださつていた横山さんが、不慮の事故でお亡くなになりました。先月号もいつものようにそつと取りに来て配つてくださいました。私が、気づいたときにはすでに車に乗ろうとしておられたことが今でも心残りです。出石地区は、上は寺坂から、下は豊岡鉢山まで、多くの谷に分かれています。それを、毎月毎月、何十年にもわたり、黙々と坦々と配つてくださいました。ふと、先月号で紹介されたお釈迦様の弟子の物語と重なりました。「何事についても続けることの大切さ」横山さんのご奉仕はまさにこれでした。今頃、お淨土で、阿彌陀様から「よう続けてくれたなあ」と迎えてもらっていることでしょう。ありがとうございました。合掌

(文責 前住職)



(文責 前住職)